

# 宮都における大甕

小田裕樹（奈良文化財研究所）

## はじめに

古代宮都は政治・文化・経済の中心地であり、各地から大量のモノが運び込まれ、消費された。このような特質をもつ宮都では、大量消費に備えた保管・貯蔵のために貯蔵容器が重宝されていたと考えられる。特に、液体などの貯蔵に優れた須恵器甕は単なる貯蔵だけではなく、醸造・発酵のための容器としてもその機能を果たしていたものと想定される。

宮都や官衙・集落遺跡において、須恵器甕はありふれた出土遺物の1つである。しかしながら、現在の古代の土器研究において須恵器甕をはじめとする貯蔵具に対する関心が高いとは言い難く、甕の出土傾向を把握する方法論にはじまり、宮都出土甕の特徴や歴史的な位置付けについての共通認識が得られているとは言い難い。

そこで本稿では、宮都から出土する須恵器甕を対象に、分布や出土傾向についての基礎的な整理をおこない、宮都における大甕＝大型貯蔵具の歴史的性質について見通しを示したい。

## I 研究史と問題の所在

**研究史** 宮都における須恵器甕などの貯蔵具を扱った初期の研究として関根真隆による研究があり、文献史料の記載内容から甕の器名と用途について特徴が整理された(文献26)。この研究は、巽淳一郎によりさらに深化され、平城宮・京出土甕の容量・形態の分析をふまえて出土甕の器名と用途の比定がおこなわれた(文献28)。また巽は、壺・瓶類を含めた貯蔵具全般を対象とする集成作業により宮都出土貯蔵具の基礎資料を提示し、その生産・流通体制について言及している(文献27)。

上村憲章は宮都出土甕を中心に容量の復元をおこない、古代から中世にいたる甕には40ℓ前後以下の小型の甕が圧倒的に多く、200～300ℓの大型の甕と

50～100ℓ程度の中型の甕があること、これらは据え置きの大・中甕と持ち運び可能な小型の甕という組成がみられることをあきらかにした(文献9)。

近年、木村理恵により宮都出土甕と生産地に関する研究が進められており、平城京内における消費動向の影響を受けて、奈良時代後半に陶邑窯における甕の生産体制と宮都の流通体制が変質するとの見通しが示されている(文献13～16)。

また、宮都では甕据付穴とみられる土坑を内部に有する建物が検出されることから、これらの甕据付建物に注目して宮都における醸造・酒造の実態をあきらかにする研究がある(文献11・12・50)。特に、玉田芳英は平城宮造酒司地区および平城京内の甕据付建物の分析をおこない、奈良時代後半以降に平城京内における醸造量が飛躍的に増加することを指摘した(文献32)。問題の所在 宮都出土の須恵器甕に関わる研究は、出土甕の容量分析にもとづく器名・用途の検討や遺構としての甕据付建物の分析が進められ、一定の成果を挙げている。しかしながら、各宮都からどのような甕が出土し、いかなる出土傾向にあるのか、という基礎的な情報の整理がおこなわれておらず、古代宮都という空間の中で須恵器甕がどのような特質をもっていたのか、という歴史的な位置付けに関わる議論は進められていない。

筆者は、この理由として須恵器甕が食膳具に比して時期差を示す属性の変化に乏しく、破片の接合作業や実測に時間が多くかかる割に、出土遺構の時期決定にあまり寄与しないことから、報告書掲載や整理作業における優先度が低いという事情によるものと推察する<sup>(1)</sup>。ゆえに現時点で宮都出土甕の全体像を把握することには大きな困難がともなう。

しかし須恵器甕は、耐久性の高さから消費地における搬入から廃棄までのライフサイクルが長期間にわたることがあきらかにされており(文献10・34)、貯蔵

容器としての機能と汎用性の高さからも、食膳具や煮炊具などとは異なる特性を有していたと想定できる<sup>(2)</sup>。ゆえに、従来食膳具の様相を通じてあきらかにされてきた古代宮都の特質とは異なる側面を見出せる可能性がある。

また、古代の土器研究において古墳時代から古代にいたる食器構成の変遷の中で、飛鳥時代後半に成立する律令的土器様式(文献5・46)の特質の1つが「多様な器種分化」にあり、大量の官人層の出現とその特殊な生活形態と関連することが指摘されている(文献46)。同様の傾向が貯蔵具においてもみられるか否か、それが古代宮都の成立や展開と関連するか否かを検討しておくことは、古代の土器研究においても意味があると考えられる。

さらに、須恵器甕は内容物で満たすと相当の重量になることから、据え置いて使用される場面も多かったと想定され、遺構と不可分の関係にあると考えられる。須恵器甕の組成や出土状況に注目することで、出土遺跡や遺構周辺の空間の性格についても有益な情報を得ることができる可能性を有している。

そこで本稿では、宮都における須恵器甕の歴史的な位置付けについて見通しを得るべく、まずは現在までに報告書で図化された資料をもとに、宮都における甕の出土傾向の把握に努めたい。これらの基礎的な情報の整理をおこなった上で、宮都における須恵器甕の特質について検討する。上述のように、整理作業や報告書作成時の抽出作業を経ているため、報告書掲載資料の分析から浮かび上がる須恵器甕の出土傾向と出土実態が異なる可能性は否定できないが、この資料的制約を認めた上で、今後の調査・研究のたたき台となる見通しを提示したい。

## II 資料と方法

### (1) 対象地域と資料

本稿では、古代宮都である飛鳥地域、藤原宮・京、平城宮・京から出土した須恵器甕を検討対象とする。これらは各宮都で刊行された発掘調査報告書・概報類を検索して、図示された甕の集成作業をおこなった。飛鳥地域80点、飛鳥宮53点、藤原宮21点、藤原京113点、平城宮121点、平城京357点である(別表)。なお古代の遺構・整地土から出土した甕を対象とし、包含層出土の甕は除外した。また甕は使用期間が長く、その後も他用途に転用されるなど廃棄まで

の時間が長いことが特徴であること(文献10・34)、時間的な変化を示す属性が少ないことから、時間的な位置付けについては共伴遺物に従うものとして、細かな時期の位置付けは最低限に留める。

### (2) 研究の方法

本稿では、宮都出土の須恵器甕の特質をあきらかにするために、甕の器種<sup>(3)</sup>分類をおこない(Ⅲ)、各宮都における甕の出土様相を整理する(Ⅳ)。これらをふまえて宮都から出土する甕の特質を検討する(Ⅴ)。  
分析の視点 本稿では、宮都における甕の器種分類と出土傾向をふまえた上で、各宮都の代表的な遺跡・遺構出土の甕の組成に注目する。これは宮都における甕のあり方を器種レベルで把握するとともに、甕の組成の違いから出土遺跡や遺構周辺の空間の性格を読み取ることが可能かどうかについて検討するためである。

外形トレース法 本稿では、報告書掲載資料を対象とすることから、分析にあたり外形トレース法を採用する。これは報告書掲載の実測図をスキャンし、描画ツールソフトを使用して外形をトレースし、同一の縮尺に揃えて口縁部上端線と中軸線を基準に重ね合わせる方法である。この方法により、各甕の形態・法量を直接比較することができ、その結果を視覚的に明示できる。

上述のように須恵器甕は破片として出土することが多いという特性から、報告書では口縁部～頸部の実測が可能な個体の図面が優先的に報告されることが多い。そこで外形トレース法を用いることにより、口縁部のみが図示された個体であっても、似た形態・法量をもつ完形に近い別個体の外形ラインと合わせることで、大体の全形が推測できるという利点がある。また、実測図に表現された成形・調整に関わる痕跡や装飾文様など製作に関わる属性を省略する一方で、形態・サイズという貯蔵容器としての甕本来の機能に関わる属性を強調できる効果がある。以上の理由から、本稿における報告書掲載資料を対象として古代宮都出土甕の組成を検討とする目的に、外形トレース法が効果的であると考えた。

ただし、これはあくまで報告書掲載資料の分析という本稿の目的に合わせて選択した方法であり、将来、各遺跡出土甕の全点の報告がおこなわれ、出土甕全体の様相を把握できる環境が整えば、また別の

方法を採用することにより再検証したい。

本稿では、以上の方法を用いて宮都出土甕の分類をおこない、各宮都における出土傾向と甕の組成について検討する。

### Ⅲ 甕の分類

奈良文化財研究所の器種分類 宮都における甕の器種分類については奈良文化財研究所の分類案がある。最新の器種分類案である『平城宮発掘調査報告Ⅻ』(文献41)および『平城京事典』(文献22)では、須恵器甕をA・B・Cの3器種に分類している。これによると甕Aが「卵形の体部に外反する口縁部を付したもので、口縁部は肥厚し、外傾する面をなす」、甕Bが「卵形の体部に内彎ぎみの口縁部を付す。口縁端部を丸くおさめる例、内傾する例がある。肩部に把手を付す例もある」、甕Cが「肩の張った広口短頸の甕。肩部径が器高をしのぐ例が多い。高台を付す例、肩部4か所に耳状の把手を付す例もある」と定義する。

一方で巽淳一郎によると、甕Aと甕Bについて「口縁部の作工の違いを重視し、「口縁端部が小さく上方に立ち上がり、端部外側面を縁帯風に作り、口頸部がラッパ状に開くものを甕Aとする」、「甕Bは口縁端部が平坦、もしくはくぼんだ面をなし、短頸で口頸部の外反度が小さい一群を指す」とする(文献28)。

本稿における甕の分類 本稿では奈良文化財研究所の甕分類を基本的に踏襲するが、分析の過程で甕Aと甕Bの中間的形態を呈する個体が多く存在することが判明したため、これについては仮の分類案を提示しておきたい。

宮都出土甕全体の外形トレース図を合わせると、口縁部が大きく外反する一群と短頸広口の一群を明瞭に区別できる。前者を甕A A、後者を甕Cとする。甕A Aおよび甕Cを除いた甕は口径30cm以下のものがほとんどであり、これが奈良文化財研究所分類の甕Aと甕Bにまたがる多様な口縁部・口縁端部形態がみられる一群である。この一群をまとめて甕A Bと仮称する。

甕A A 頸部高が6cmを超え、口縁部が大きく外反する甕を甕A Aとする(図1)。大多数が口径30cmを超えるが、例外的に口径30cm以下の個体も存在する。

甕A Aは口径40cmを超える大型と40cm以下の中型のサイズがある。大型の甕A Aは頸部外面に沈

線状の段や波状文を施文する事例が多いことから、古墳時代以来の大甕の系譜を引くものと理解する。また頸部高が6cm以下ではあるが、口縁部が大きく外反する甕が存在し、特に縁帯状垂下形口縁(文献15)をもつ甕は奈良時代後半の陶邑窯で生産された甕と考えられる。これらも古墳時代以来の大甕の系譜を引く新しいタイプと解して甕A Aに分類する。

甕A B 口径30cm以下で、頸部高が6cm以下のものを甕A Bとする(図2)。甕A Bは宮都出土甕の中でもっとも多く存在している。甕A Bには口縁部が外反する／内彎する／直立するもの、口縁端部を肥厚する／丸くおさめる／内傾するものなど多様な形態があるが、甕A Bすべての外形トレースを重ね合わせてみると不連続は見出しがたい。その一方で、器高には複数のまとまりが認められることから、甕A Bは口縁部形態よりも実測図上の器高の違いとして反映される容量の違いに意味があるとの見通しを得た。

そこで甕A Bについて頸部高(口縁端部から頸部の屈曲点までの高さ)を基準に、①3cm未満、②3cm以上5cm未満、③5cm以上6cm未満の3種に分類した。これをみると、頸部の短い①は、②・③に比べて相対的に小さい傾向があるものの、②と③ではサイズや形態に大きな違いはみられない。むしろ、頸部高の違いにも関わらず、器高が24cm、30cm、36cm、42cm、48cmの範囲でまとまる点が注目される。これは、外反・内彎といった口縁部形態の差異に明瞭なまとまりを見出すことができない点とは対照的である。

この分析から、甕A Bにおいては口縁部・口縁端部の形態の違いよりも器高の違いが有意であり、これは甕の容量の違いを反映しているものと理解する。甕A Bには複数の容量の違いが存在しており、「複数規格の容量」を確保することに意味があったと考えられる。甕A Bの口縁部形態については、規格となる容量を確保した上で、生産地・製作者の個性、貯蔵する内容物や使い方などさまざまな要因により差異が生じたものと推測する<sup>(4)</sup>。

甕C 広口短頸の形態を甕Cとする(図3)。これは従来の奈良文化財研究所の分類を踏襲するが、甕Cと相似形の器種に鉢Dがある。鉢Dは「外反する短い口縁部と上位で肩の張る体部からなる。高台を付す例もある」(文献22・41)と定義され、甕Cとは別器種として分類される。しかし、外形トレース図をみると甕